

# POINT OF VIEW

## 「図書館とは？」を求め海外視察①



谷口 とよ美

最近の日本では、「図書館とは？」のコンセプトが、私たちが目指してきたものは少し、その未来線がずれている感がある。このたび立て続けに外国の図書館を視察したが、「図書館とは？」をつねに確かめ、原点を見失わずに進化させる仕事をするための糧にすることができた。

立て続けに外国の図書館を視察した。

今年4月、韓国国立中央図書館、韓国国立デジタル図書館 "library"。同年6月、オランダ、アムステルダム中央図書館。世界の図書館を見た。

それは「図書館とは？」とつねに確かめ、原点を見失わずに進化させる仕事をするためである。

最近の日本では、その「図書館とは？」が、私たち(弊社)が目指してきたものは少し、その未来線がずれている感がある。

どちらかというところ、囲碁という「シチョウ(四丁)」を見ているような気がする。ことがあるのだ。

人々を書籍に近づけるために図書館で書籍を売る、それも一理ある。

しかし、私たちは、書籍の魅力を十分に引き出す工夫を重ね、どんな企画も書籍につなげることで、その結果として、人が集い、人がつながり、地域が広がる、図書館の運営は、まさそこら始まるものと考えを持っていて。

たとえば、香川県にある、まんのう町立図書館では、もっと書籍に近づいてもらうために、電子書籍も試している。

具体的には iPad や kobo の貸し出しを行っている。隣接する中学校の生徒たちは、図書館で日常的に iPad を使っている。

電子図書館システムも時代や市場の流れを見極めながら、いろいろなチャレンジしようと考えている。まんのう町立図書館で

は、貸し出しはセルフである。カウンタにある貸出機は利用者のほうにしか向いていない。

一部セルフ機能を導入している図書館は多くあるが、完全セルフはおそらく全国で初めてではないだろうか。

返却は、返却ボックスへ入れてもらうだけである。返却された資料は、スタッフたちがダブルチェックをすることにより、ミスがなくし、また、どんな書籍がよく利用されているのか、スタッフの資料への知識を高める機会としている。

プロの書評家や、出版関係者による「まんのう町立図書館のためのおすすめ本リレー」も始まった。

図書館はスタッフだけの

データベースで運営する時代は終わったと考える。図書館に対するニーズの多様化に対応するためには、その運営コンセプトをより深めていくためにも、各方面のプロフェッショナルの力を積極的に取り入れる段階に来ているのではないだろうか。

まんのう町立図書館では、企業とコラボレーションした各種講座も開いている。飲料メーカーから講師を招いて、赤ちゃんのウンチで健康状態を見ようという「うん知育講座」や、携帯電話会社による、「シニア向け携帯講座」「保護者向けスマートフォン講座」など、利用者の役に立つことは何か？をつねに考えて講座や企画を実施している。

また、楽しむ場であることも大事にしている。秋には、「案山子」だてて書籍を読む「コンクール」を実施している。

歴史上の人物や、物語の登場人物に扮した案山子たちが、おすすめの書籍を手に図書館内に登場する(どこからでも参加可能)。

(次回に続く)

たにくち・とよみ リフネット社長。三重県生まれ。三重県職員などを経て02年1月リフネット設立。13年ミライトグループに